

三種類の「読みのスタイル」と「ジグソー学習」の工夫

新しい指導を考える会

1 「読みのスタイル」に応じた学習過程

竹内好訳の『故郷』は、巧みな情景描写や胸に迫る言葉の数々などから、国境を越えて愛され続ける名作である。ところがこの名作は、長い教科書掲載の実績にも関わらず、現代の子どもたちには今一つ人気がない。中には、「暗い」「分らない」「読みたくない」と強い拒否反応を示す生徒もいる。ただ、一部にそのような意見があるとはいえ、やはり、中学三年生のこの時期、風景描写によって登場人物の心情を暗示したり、人物の様子や言動を克明に描くことによって作者の意図を伝えたりする魯迅の優れた文章表現を、ぜひとも読み取らせたいし、味わわせもしたい。

そこで、拒否反応を示す生徒も、無理なく「読み」の学習に向かうことができるような授業を目指し、従来の教師の読みに収斂しうれんされていく単線型の学習から、生徒の「読み」のスタイルに応じた複線型の学習にシフトしてみようことを提案したい。

1 三種類の「読みのスタイル」

目の前の生徒の「読み」をつぶさに観察していくと、次の三種類に大別できることに気づく。すなわち、①Ⅱ「体」を使つて読む、②Ⅱ本文の「中」を読む、③Ⅱ本文の「外」を読む、である。①は、声に出して本文を何度も音読することによって内容理解を深めていく読み方であり、②は、テキストを分析的・想像的に理解していく読み方、③は、一見どうでもいいような教材文および作者の周縁的内容が気になり、それを知るまでは本文の「読み」に入っていくことができないという生徒が、まずは周縁的内容を納得のいくまで調べ、まみれ、浸った後、やっと本文の「読み」に向かつていく読み方である。

これらの読み方は、それぞれの生徒の認知スタイルとも考えられるし、小学校から培い、身に付けた「読み」の三段階（音読・精読・味読、あるいは、基本・応用・発展）が、色濃く影を落としているとも考えられる。いずれにせよ、生徒一人一人には、それぞれに得意な読み方や、読み癖のようなものが存在する。そして、その読み方、すなわち生徒それぞれの「読みのスタイル」に寄り添うことが、教材文に対する拒否反応の突破口になり得ると考えられるのである。

そこで、この「読みのスタイル」を意図的に授業に位置付けたり、生徒に選択させたりすることによって、意欲化を図ると同時に、「読み」の深化を促す学習過程を工夫していきたい。

2 「自分なりの答え」から「交流会」を経て、「発表会」へ

生徒に、それぞれの「読みのスタイル」を許容しながら授業

しなかったり気が散ってしまったりする生徒など、個に応じたきめ細やかな指導や援助にも大きな効果が期待される。

2 「活動的で表現的で協同的な」学習過程

現代の子どもたちの特徴を端的に表すと、「言葉で考えた」り読んだり書いたりするのは苦手。まずは行動、言葉はその後」ということになろうか。また、「言葉以外の表現力や表現手段は豊かで巧みなのに、仲間と協力して何かを作り出すことは苦手。強く求めているものの、コミュニケーション能力や協同の気持ち、および技能が著しく低い」とも言える。

そこで、この特徴を切り込み口とした、「活動的で表現的で協同的な読み」の学習過程を提案したい。

1 「ジグソー学習」の実践化

「長い」「難しい」という反応の多い文章には、全体をいくつかの場面に分け、それぞれのグループが分担して読み、互いに教え合うという「ジグソー学習」が実践的である。

『故郷』では、二〜四人のグループを構成し、次の六つの場面のいずれかを担当して「読み」の学習に取り組んでいく。分担する場面とは、①「わたし」の帰郷、②思い出の中の故郷、③現実の故郷、④ルントウ（閩土）との再会、⑤わら灰を使った隠匿事件、⑥「わたし」の離郷、の六つである。三〜四時間、自分たちが担当する場面を中心に、寸劇風・漫画風・クイズ風・テレビ解説風などの中から選んだ「こうすれば分か

「体」読み・「中」読み・「外」読みの順番や内容を生徒一人一人に委ねるとなると、同じ授業時間の中に、音読をしている生徒もいれば、ワークに取り組んでいる生徒や、作者のプロフィール等の資料を読んでいる生徒もいるということになる。そこで、授業の重なる他のクラスと連携をとることによって、「静かな学習環境」と「声を出したり動き回ったりできる環境」および「資料などを検索・調査できる環境」など、活動場所の確保を行いたい。

異なった活動場所での学習には、一人の指導者では十分に目が行き届かない場合が生じる。教科会はもとより、全校規模の教育課程検討委員会などの協力を得たT T（チーム・ティーチング）を活用していきたいところである。なお、T Tの効果的な活用は、ただ単に活動を保障するだけでは遅れてしまいがちな生徒や、学習に入っていくことの難しい生徒、すぐ飽きて

3 活動場所の確保とT Tの活用

を成立させるためには、共通の学習課題が必要である。教師側からの提示による「最後の場面で、主人公の胸に『希望』という言葉が浮かんだのは、なぜなのだろう？」という学習課題を、まず設定する。そして、「自分なりの答え」を書く第一段階から、それぞれの答えを交流し合い、刺激し合う第二段階の「交流会」を経て、それぞれの「読みのスタイル」に応じた学習活動を保障していく。すなわち、「体」読み・「中」読み・「外」読みのいずれか、もしくは、その組み合わせによる読み方を選択させるのである。最後は、「交流会」と「自らの読みのスタイル」を経て到達した、一人一人のまとめの「発表会」。そして、学習全体を振り返りながらの自己評価という流れとなる。

馬馬虎虎

○発行日
2002年2月4日

○発行者○
  
  

閨土とレントリ

二人が幼い時、閩土は魯迅にとつて英雄と
毛いえる存在であつた。魯迅はさぞかしがっつ
りかし、互いに大人となつて
魯迅が帰郷して再会した際
閩土は兎しだ
クノボーのようになつてしまつていたのであ
ろ。そして、仄の中に

血をかくして盗みをは
かろうとした閩土に
さぞかしがっつりしたであ
ろ。魯迅の思い出であ
つたが、その閩土は美し
い思い出の閩土とはか
け離れてしまつていた
ぞれで毛やは魯迅は
閩土の境遇を嘆き同情
している。でも、閩土

「豆腐屋小町」は原文

友代と絵里子の意味調べ

◇お妾ミ今で言う愛人に近いかもしれ
ない。(現代では死語であろう)㊤
本当にう人もお妾がいたかし(終)
されてゐた。(奇形、てミ怖いよ
㊤)いつの時代でも女性性は苦勞す
るものですね(注)㊤)

豆腐屋小町の謎？

一小鳥の上手なつから
まえ方
雪が降つた
あとに空煙をつくり、大きな籠を持、てきて短いつかえ棒をか、てくずもみをまゝく。そして、小鳥が来て食へてゐる時、

ういろいろいい加減な部分を人間からなくさなければと、生涯をかけて戦つてきたのだ。

遠くの方が棒に結えてある縄をひっぱる。これでおk。二種のヒトリツ月のある晩かりかり、て音がしたら手に刺叉を持ち忍びより突く。

※注意：猪の毛はすばるので気をつける

閏土に教わる
狩り術

閨土に教わる
✦ 菊守以衛

一小鳥の上手なつか
まゑ方
雪が降つた
あとに空畑をつ
くり、大きな
籠を持つてき
て短いつか
え棒をかゝて
くずもみをま
く。そして、小鳥が
来て食べている時、

遠くの方が棒に結
えてある縄をひっけ
る。こゝでOK。
二猿のとりのオ
月のある晩
かりがりて
吾がしらた手
に刺叉を持ち
忍びより突く

※注意：猿の名はす
べるので気をつける

魯迅
RO
JIN

一八八一年浙江省紹興府の城内に生まれる。本名は周樹人、魯迅はペンネームである。彼は一九三六年に死去するまで、文筆活動を通じて社会のあらゆる悪と戦いを続けてきた。魯迅が生涯をかけて戦ってきたものは馬馬虎虎（いい加減さ）であった。中国に存在する大きな不幸の原因が馬馬虎虎であることを見抜いた魯迅は、それを暴き、白日の下にさらすことで中国を救おうとした。彼の著書は、人々に自分達のいい加減さを知ってもらうことで少しは良い人間になつてくれるのではという希望を持って書かれてゐると私は思ふ。

後記

私たちも幼なじみ
だけど、わたしと関土
のような関係にはな
らないことを誓う☆☆☆

